

**Keywords** : ドイツ文学・ドイツ語学、言語哲学、比較文化、レトリック、教養

### ◆研究概要等

専攻はドイツ文学・ドイツ語学で、とくに言語哲学の方面から精神史と呼ばれる領域を中心に研究してきました。また、教育面では、本学に勤務し始めてからすでに三〇年以上に亘ってドイツ語教育に携わっています。その間、教養部、語学教育部、総合社会学部という三つの組織に所属する経験を通して、大学における教養教育のあり方について深く考えるようになりました。そのため、十数年前からは語学教育と教養との関連について、また、現在は本来の専門である言語哲学の知見、とくにヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語思想をてがかりにしながら、大学における教養教育のあり方を模索することが最も大きな関心であり、理論と実践の両面からこの問題に取り組んでいます。

### ■研究テーマ等

#### 1. ヴィルヘルム・フォン・フンボルトをはじめとするドイツ言語思想の系譜

ヨーロッパには様々なタイプの国がありますが、ドイツはイギリスやフランスに政治や経済で遅れをとったことから、文化を中心に国をまとめようという意識が強く、それが学問や芸術分野の発達を促しました。なかでも言葉への関心はきわめて高く、130年の歳月をかけて完成したグリムのドイツ語辞典や、詩と旋律を見事に融合させたシューベルトやシューマンの歌曲などはそれを典型的に物語っています。フンボルトは彼らと同じ十九世紀初頭、世界中の言語を渉猟して各言語にはそれぞれ独自の世界像があるという確信を得ます。言語は単に文化を反映するばかりでなく、言語そのものが国民性や文化の形成に大きく影響するという彼の見方は、やがて二〇世紀の現代思想が言語に注目する重要なきっかけとなりました。

教養・基礎教育部門  
第二外国語  
教授

やまどりきよし

山取 清

yamadori@socio.kindai.ac.jp



#### 2. ヨーロッパと日本における教養教育をめぐる思想とその変遷

フンボルトの名前は日本では一般に教養教育と結びつけて知られています。これはこの国の学校制度がドイツに倣ってつくられたことによるもので、「教養」という言葉自体、かつてプロイセンの教育改革を任せられ、大学の近代化を提案したフンボルトと深い関係があります。ただ、戦前から戦後へ、さらに近年の大学改革を経て、「教養」の捉え方が大きく変容し、現状はフンボルトが唱えた理想とはかなり違ったものになっており、現在では「教養」の意義をいま一度問い直す必要性が叫ばれています。



3. 言語技術としてのレトリックの再評価  
古代ギリシャは民主制を発展させたことで知られますが、やがて民主制の衰退とともに言論で人を自由に操る術を説くソフィストと呼ばれる人々が現れます。プラトンやアリストテレスが始めた哲学はそのような歪んだ言語観への抵抗でした。ただ、欧米ではレトリックが様々に変容しながらも普遍的教養として今日まで受け継がれましたが、そのような伝統が浅く、しかも様々な情報が溢れる現代の日本の社会では、思考の鍛錬としての哲学と言語技術としてのレトリックの重要性がいま真剣に見直されるべきであると考えます。

4. ヨーロッパの言語や文化との比較をてがかりに日本語と日本文化を研究

総合社会学部に所属し、ゼミを担当するようになってからは、かねてより興味をもっていた日本語や日本文化の問題にも一層目を向けるようになりました。とくに能・狂言・文楽などの古典芸能や絵画・建築などの芸術分野の鑑賞と研究に積極的に取り組むだけでなく、これらと専門の言語研究との関連にも配慮し、その成果を日本文化研究所の叢書に論文として発表するとともに、ゼミや文化論の講義にも応用する試みを行っています。

## ●論文

1. 『レトリックの変転と現代教養論—比較言語文化論の視点から』近畿大学日本文化研究所編「変化と転機を見つめて」所収、風媒社（2016年）2. 『「自然」ということばについての考察—日本人論の視点から』近畿大学日本文化研究所編「自然に向かう眼」所収、風媒社（2015年）3. 『西洋のロゴス、日本の言霊』近畿大学日本文化研究所編「日本文化の明と暗」所収、風媒社（2014年）4. 『危機の時代と教養—フンボルトの教養理念と言語思想をてがかりに』近畿大学日本文化研究所編「否定と肯定の文脈」所収、風媒社（2013年）

## ●編集

『パスポート独和辞典』白水社（1996年）

## ▲趣味等

文化・歴史・芸術、古典的なものに興味があります。

- 1:チェロ演奏
- 2:能楽鑑賞
- 3:透明水彩画
- 4:美術館訪問
- 5:寺社等の史跡巡り



## ◆ゼミの宣伝等

山取清ゼミでは、言語関連の文献の精読を中心にすえながら、フィールドワーク（能・狂言等の古典芸能鑑賞と美術館・社寺巡りなど）をまじえて、知識と体験の両面から言葉と文化に対する意識を高め、芸術的感性を磨くことをテーマにしています。

